

## 編集後記

今年度も4つのグループそれぞれのテーマで研究を行い、その成果を報告書としてまとめることができた。まずは関係各位に深くお礼申し上げたい。

それぞれのグループが集めたデータの分析について指導し、しばらくのちに提出されたレポートを読んでいると戸惑うことがある。この実験はこんな結果だったろうか。もっとポジティブな結果ではなかったか。統計的分析の結果を誤って報告しているわけではない（書式が誤っていることは少なくないが）。それにもかかわらず、結果についての解釈の方向性さえ印象と一致しないのはどういったわけか。

グループ研究の授業はスケジュールが押し気味になり、データが集まってから分析、レポートの執筆まで駆け足になることがほとんどである。そのため、結果の解釈について共有する十分な時間が取れないことが多い。それが一因であることは察せられるが、分析の結果そのものはある程度共有されているのに、なぜこのようなことが起こるのだろうか。

データに基づいて何ごとかを結論することは案外難しい。数値そのものは、条件や測定時点によってある程度違うことがふつうである（完全に一致することのほうがめずらしい）。その意味では、条件等によって数値は“何か違う”のであるが、それがどの程度違っていれば“意味がある”といえるのかを判断するのがまず難しい。数値的に違うもの同士を差があるとみなすならほとんどすべてのケースに“差があった”ことになってしまう。そこで、この程度の小さな差は意味がないだろう（0とほとんど区別がつかない）という基準を設けて判断することになる。帰無仮説検定がその役割を担っているのだが、この基準に照らして判断することが次に難しい。“差があった”か“差がなかった”かを指摘することはできるのだが、そこで話が終わってしまうことが多い。

とはいえ、これは検定という（理論的には）複雑な手続きが介在することによっているというよりは、データと心理学的な議論をすり合わせることの一般的な問題であるように思う。仮に平均値が特定の基準値を数値的に超えたかどうかを判定する手続きに置き換えても同じことが起こりそうだからである。“差があるといえるのか”（“十分な影響力があるといえるのか”と言い換えてもよい）を明確にすることは議論の前提である。重要な前提ではあるが、それだけでは十分ではない。差があることから何が主張できるのか、何を主張したいのかを論じなければ、手段と目的を取り違えていることになる。

2020年3月9日

大正大学心理社会学部人間科学科

井関 龍太

r\_iseki@mail.tais.ac.jp